目まいのする散歩

武田泰淳

中公文庫

中公文庫

目まいのする散歩

定価はカバーに表示してあります。

1978年5月10日初版
1998年9月20日4版

著者 武田泰淳

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1978 CHUOKORON-SHA,INC. / Hana Takeda

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-200534-5 C1193 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

日きいのする散歩

日文701447372

著

日本図書文庫

財団法人日本科学協会

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目次

目まいのする散歩　5
笑い男の散歩　25
貯金のある散歩　49
あぶない散歩　69
いりみだれた散歩　93
鬼姫の散歩　119
船の散歩　143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安全な散歩？ 169
解説 後藤明生 203

目まいのする散歩

六月の午前七時、久しぶりの好天気に誘われて、山小屋を出る。医師に禁じられた酒をのむと、ついふらふらと無理がしたくなる。外出する必要は全くないのに、庭の坂を上りつめて、門の外へ出た。多少の努力感はあったが、警戒していためまいの現象は起らない。自動車道路まで行ってみようと歩きだす。まだ大丈夫である。自動車道路は坂道になっているので、スピードを出した車がくると危険である。横断すると上り道になり、その先に石山がある。石山まで行く途中は舗装されていないで、雨に洗い流された石がごろごろしている。そこまで行きつけば、西湖の村村が樹海の遙か彼方に見渡せる。石山の向い側は西洋人の別荘であるが、人の気配はない。西洋人が一家できているさいは、目はしのきく西洋人の子供が顔を出して、石山で眺望を楽しんでいる私を面白がるか、それとも怪しむかして、様子をうかがいに近よってくるので、気が静まらない。石山というのは、頑丈な岩盤をダイナマイトで爆破したあとであり、大きな岩がわれてつみ重なっていて、異様な風景である。その一段低い前側がブルドーザーでならされていて、樹木の

生い茂った沢に面している。そこは、どういうものか草が生え茂らないで、溶岩の台地をいつもむきだしている。遠くの低地からふき上げる風が心地よい上に、特別上等な場所と思われて爽快な気持になる。いままでやったことはないが、座禅の真似をして坐りこんだ。座禅に対しては、わざとらしくて一種の抵抗を感じたが、誰もみていないことだし「自分は座禅をしているわけではない」という心づもりもあったりして、自然にあぐらを組んだ。二、三度尻の下の加減をみてから、じっとしていると、足を投げだしたり、揃えたりして普通に坐っているよりも具合がいいように思われた。富士山は、今上ってきた坂道の正面に頭をのぞかせているはずだった。坐っている場所からは、全く見えないはずだし、第一、富士山には背をむけて坐っている。やがて、立ち上るとめまいがきた。「やっぱり思ったとおりだ。そんなにうまくいくはずがない」と考えながら（考えるといっては、どうも意味がはっきりしすぎていて、本当は、もっとぼんやりした感じだが）しゃがみこむ。まだ体が不安定で、揺れ方がひどいので、そのまま、地べたに仰向けに寝てみた。凸凹した地べたは寝心地がいいとはいえないし、自分の恰好が適当か否かも、よく定めがたいが、他人に迷惑をかけるわけではなし、その瞬間の自分にはふさわしいやり方だと思った。目をつぶっているので、あたりは暗くなったが、別にひどい状態がきたというわけではない。あんまりいいざまではないと感じて立ち上ろうとしたが、やはり駄目だった。鳥の啼き声は、あいかわらずしている。陽もよくあたっている。少し待っていれば、やがて元通りになる、という

自信があるので静かにしていた。

『中央公論』の新人賞の選者にえらばれたのは、伊藤整、三島由紀夫、それに私の三人だった。その二人は死んでしまったが、一人はガンを患っての病死だし、一人は割腹自殺だった。一人はひっそりと冷静に（と外部には想像されたが）死を迎え、一人はその自殺した日がいつまでも忘れられないほど、よく晴れた十一月に、一世を驚愕させて、はなばなしく死んでいった。私はどんな死に方がいいだろうか、と冗談めかして話題にしたときに、二人とはちがった死に方をするとすれば、殺される、刺殺される、処刑される、あるいは誰にもわからぬやり方で抹殺される死に方がいいだろうとしゃべったことがあった。理くつはその通りだが、殺されるチャンスなど、私を訪れるはずもなかった。だが、今、何の苦痛もなく、ただ寝そべっているだけの自分を発見したとき「恍惚死」ということが思い浮んだ。「恍惚死」といえば聞えはいいが、ボケて死ぬことである。そうなれば、自分にとっては大へん楽で、じたばたしないでもすむことである。しかし、なんぼなんでも、私のような人間が、そのような安楽な死を遂げられようとは信じていなかった。深沢七郎氏が「武田さんはきっと死ぬときには、あわてず騒がず死ぬでしょうな」と真剣に質問したとき「いや、とんでもない。僕は必ずじたばたして死ぬにきまっているよ」と答えたことがあった。

こじゅけいか、きじか、大きな羽音をさせて舞い上ってから、すぐ舞い下りて地面を歩く鳥の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

足音が聞えた。自分の病状を他人に説明するよい手がかりができたという判断がわいたのだから、つまり、自分の病気とか、死とかを、自分で演出してみたい気持が多少あったのかもしれない。私は演出とか演技とかは、苦手なタチで、その点は、とおく三島氏には及ばなかった。それ故、意志や能力なしに、演出や演技に近づけるものなら、これに越したことはなかった。

三度めか、四度めに立ち上ったときに、めまいが消えたので、坂道をひき返そうとして、十歩ばかり歩くと、また、めまいがきた。出来るだけ、ゆっくりと右に左に傾きながら歩いた。そして、また、しゃがみこんだ。今度は、ねころんだりしないで、どうやら保つことが出来た。自動車道路を一気に横断して、両側に樹木が茂っているところで、また、しゃがみこんだ。ガードマンを二人乗せたジープが走ってきて、しゃがみこんでいる私のすぐそばで止まった。一人が降りてきて「別荘にいらっしゃったのですか」とたずねた。私は別荘客にはふさわしからぬ服装をしていた。上着もズボンもどちらかといえば、土地のじいさんのような姿だった。だからガードマンは特に「別荘にきていらっしゃるのですか」と怪しんだにちがいない。私は姿勢正しく立ち上って、「一四一号の武田です」と出来るだけ明確に答えてから、二人がジープに乗りこむまで、その様子を反対に確かめるように、取調べでもするように見つづけていた。そのうちの若い方には見覚えがあった。「富士」執筆に熱中している頃、熊が一頭、庭を横切ったことがあった（もしかしたら、その頃から幻覚がはじまっていたのかもしれないが）。女房が管理所に報告に行く

と「えッ、熊が」といって熊狩りに参加しなかったのは、そのガードマンだった。浅間山荘事件がテレビでうつしだされる頃で、このあたりの別荘地も警戒しているらしかったが、あのガードマンでは、一人の学生もつかまえられまいと思ったりした。そのとき、また、めまいがしてきたが、それを見とがめられるのがいやなので、彼らが走り去るのを待ってから、また、しゃがみこんだ。家の門から、家にたどりつくまでの間に、まだ、二回ほど休まねばならなかった。坐りこんだまま、手の届く限り、あたりの草を、やたらにむしりとった。まだ、むしりとらねばならぬ草が沢山生えてしまっていて、庭が汚くなることが気がかりだったからだ。

「すべてのことは、たいがい無事にすむものだ」と、いつも通りの結論に達した。そして、散歩というものが、自分にとって、容易ならざる意味をもっているな、と悟った。

東京にいるとき、私の散歩する場所は、明治神宮、武道館、代々木公園の三つに定められている。その三ケ所ともに駐車場があり、車が走っていず、坂がない平地だからである。いろいろ思い合わせてみて「あらかじめ定められた散歩」という名文句、あるいは題に思い及んだ。散歩という意味を広く解釈して、人間の運命は生れたときから、あらかじめ定められているというようにうけとれもするし、地球のどこかに住みついているからには、散歩とか旅とかいっても、あら

かじめ空間的に決定されている行動範囲は、どうせ限定されているからだ。

上にあげた三つの場所は、どれも、私の現住所である赤坂から十分せいぜいでゆける。車を降りて歩きだせば、そこが申し分のない散歩の範囲である。

明治神宮には外人旅行客が多い。私が明治神宮を散歩の一つにはじめて選んだ頃は、日本人の参拝者も、外国人の旅行者もまれであったのに、年毎にその数がふえだして、時間と週日によっては、外人の方が一般人よりも多い位である。彼らは多くは団体客で、無料休憩所のある参道の中ほどから、つながって現われてくる。外人女たちの服装は遠くからでも目立つし、去年は明るい赤色の衣服が多いとすれば、今年はグリーンのパステルカラーが多いといった按配で、もしかすると日本の流行の先端は彼女たちの服装から予定出来そうだった。外人専用の観光バスのコースの最初の地点に指定されているのかもしれなかった。最初の地点であるため、みな午前中の元気がまだ一杯なので、その声も楽しげに高く響くのだった。

私は守衛さんの立っている駐車場（それは、車をとめてはいかがかと思われるように、少しいかめしくて、いつもとめてある車の数もまばらなのであるが）に車の先を正しく前に向けて、ほかの車との間にすきまのないように、ぴっちりとつけ、車を降りる。それは後向きにつっこんでとめて守衛さんに注意されたことがあるからである。車をとめるまでは一種の緊張があって、守衛詰所に休んでいる守衛さんにも、かなり離れて立っている守衛さんにも、両方に気を使うから

である。勿論、私は明治神宮に参拝するためにきたのだから、参拝者に限るという立札の指示に従っているわけである。しかし、やはり、参拝するだけではなく、散歩という目的が別にあって、それを楽しみたいという下心が働いている。鳥居をくぐるときの足の具合で、今日は調子がいいかわるいか予知することが出来る。するすると足が進んで砂利道が踏みしめられ、高い樹木にはさまれた湿った道が、次々に後へ向って移動してゆくようならば大丈夫である。神宮にきてめまいがしたことは一度もなかったが、帰途に鳥居をくぐるときに足が重くなることはあった。

たった一人で歩行訓練をしているらしい親父さんにあうこともあった。その人はいつも杖を手にして一歩一歩たしかめるようにして歩いていた。明らかに散歩を楽しむどころではなく、どの位歩けるようになったか、必死にためしている様子だった。本殿に行きつくまでに御苑に出入する門が二つある。その門を二つ左側にみて、誰でもが立ち止って見上げる大鳥居と、石でたたんだ道に入るところに立っている中鳥居をくぐって、本殿に到着する。中鳥居の脇に手を洗う清水があり、そこには、いつも必ず明治天皇と昭憲皇太后の和歌が、右と左にはり出してある。いつみても同じような調子の歌であるが、実は、日毎に別の歌ととりかわっている。女房はそれを飽きもせずによみたがっているようだ。外人客は、歌のことなど、あまり注意せずに、東洋の島国でなくてはお目にかかれない神社の「ワビ」「サビ」を味わうらしい。私よりも、もっと年老いて、もっと足許のふらついた外国婦人もいる。外国おじいさんにたすけられて歩いてゆく外国お

ばあさんもいる。驚いたことには、松葉杖を脇にはさんだ中年婦人もいて、鳥居のところで一息いれて、そこから先へ進んだらいいか、それともここで団体の連中を待っていたらいいか、とまどっている人もいた。

いつか、有名な日本人俳優が、いかにもこれから散歩するぞという完全な散歩者の服装で、勢いこんで若い女の秘書にたすけられながら、走るようにして歩いているのを見た。勿論、私も女房と同行していて、手こそ握りはしないが、形影相伴うようにして仲よさそうに歩いてゆく。守衛さんは、ことによると、この二人組を記憶しているかもしれない。あごに白ひげを生やした男が、目玉の大きいのんきそうな女と組になって通うのだから、私たちが歩きはじめると、守衛詰所の守衛さんが本殿の方へいち早く「来た」と電話で通知してあるような気がする。

私は、私たちの姿を認めたさいの本殿前の守衛さんの心理状態を考えて、辛いような有りがたいような気持に襲われる。明治天皇をよほど尊敬する人物の来訪と判断されたり、あるいは、特別の命令をもって守衛さんの勤務態度を視察にくる人物と断定されるか、その一組の男女の何れかが、白痴あるいは狂人であって、もう一人は看護人あるいは保護者として付き添っているのだと疑われると疑うからである。外人客のほとんど全部はカメラを所持している。彼らの話す言葉を耳に入れて、私は何国人であるかと推量する。どうも聞きちがえかもしれないが、社会主義国からきた人が多いようである。アメリカ人と社会主義国の人々とでは、どことなく服装がちがう。

東南アジアの人も無論いる。しゃべり方も東南アジアの人はちがっているが、どこの国の人かは、なかなか判定しにくい。いつか、南米出身の水兵らしい人が揃って参拝にきていて、彼らの歩き方も、話し方もあまり潑溂としていて場ちがいのようにうけとられたことがあった。

私たちは、たしかに参拝にきたという証拠に、おさい銭をあげることにしている。女房が勝手につかみだして投げ入れたお金は最低十五円かそこらで、たまに小銭がないときには百円位はいれているだろうと私は判断している。十円玉と五円玉とどっちが私の分で、どっちが彼女の分だかは、私にも彼女自身にも判明しない。社務所の巫女さんの服装をした少女から、お守り、お札の類を買うこともめったにない。女房はくるたびに粉でできた菓子のお供物を買ってたべたがるが、お供物の類は売っていない。うちの娘は巫女さんのいでたちが気に入って、アルバイト学生としてつとめたいと願っているが、まだそのチャンスに恵まれない。さらに足をのばして裏手へぬけて、西洋式庭園の方へ向うか、それとも、ひき返して休憩所の食堂で何か食べるかは、私の体の調子次第である。観光バスの溜り場と無料休憩所は、隣合せになっていて、外人客もジュースやソフトクリームをそこで買い、面白がって食べる。食堂は一種の奉仕施設になっていて、ほかの店よりも売っている品が良心的に出来ている。冬など陽当りがよいので、鳩の群れあつまる広場の外のベンチに腰を下すこともあり、中に入って陽当りのよい席を占め、ゆっくり時間をつぶすこともある。食堂の椅子をもっと陽当りのよい硝子ばりのドアの外に持ち出して腰を下すこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com